

刊夕日六廿月二

# 常磐毎日新聞

発行所 常磐毎日新聞社  
 印刷所 常磐毎日新聞社  
 電話 六三〇〇  
 社址 常磐毎日新聞社

## シヨツプガール

窪田志朗

資産家を父に持つ彼、コッソリと床に響くリズムミカルな靴音に聞き惚れながら、見るまでもない、買ふまでもない、ステツプを踏み歩く、此處はデパートの三階。

と——、チユツ、チユツと舌をならす音。不圖振りかへると、殿方産手袋賣場の女賣子がデツと自分を見つめてゐる。

カチツと視線の火花が散つたかと思ふと彼女は、あたたかも雲を望むかの如く上方を見て、そして物思はしげにはへえんだ。

キユービツトの亂舞を喰ひ止めること出来た心臓を持つ者でも、心を奪はれるあれがシヨツプガールスマイルだ。

思はず彼は吸ひよせられた様に、ふら／＼と近づくと、選ぶともなく、手袋に手が行つた。手袋は次から次へと手に乗るが、心はカウンメーの後に立つて、ちつと天井を見つめてゐる物靜かな、丁度窓の中で、バタ菓子を作つてゐる婦人の様にオツトリした彼女の姿態で一杯だった。

その時、軽い人の氣配と

ブンと鼻に來た快い香水と

に本能的に頭を上げると彼女が直ぐ眼の前で、ちつと自分を見つめてゐる。冷やかで、美しく、しかも暖かさうな、云つて見れば、南海の氷山に光る太陽の様な輝きを持つた黒い瞳で、そして「どれに致しませう」と云つた顔付きで——彼は貴

【朝】味噌汁：ほうれん草  
 小付 梅干  
 【書】クリームド トースト  
 草 バタいため  
 【晚】變り御飯 干鰯の清汁

族的な蒼白な顔が、カット火照る様な氣がした。でもとつさに彼は勇敢にも話しかけた。

「僕！ 餘り大膽過ぎる様にお思ひになるでせうが、お許し下さい。でも僕、本氣なのです。真剣なのです。ねー何處かでも一度僕とお會ひして下さいと僕嬉しいのですけど、僕の名前は……」

彼は名刺を取り出した。彼女はチラッとそれを一瞥すると

「何時で御座いますか」「貴女のお家へお訪ねしてようございまして、今晩で

も結構です。僕、直ぐでも

「オホ、……」  
 彼れには妙なる音樂の様に響いた。  
 「でも不可ませんわ、若し貴方が妾の家を御覧になつたら……三つしかないお部屋に五人もゐるんですの。でも妾が若し男のお友達連れて歸つたら、母さんどんな顔をするか見たいもんだわ……ね！ それぢやあ、さ來週の今日午後七時、〇〇橋の角でお待ちして居りますわ」

常磐文藝  
 山茶花

窪田志朗

秋の日だまりに  
 ほのかに  
 山茶花の花咲けり  
 そは、そのかみの  
 百々の思ひ出をそゝる花なり

秋の日だまりに  
 ほのかに  
 山茶花の花咲けり  
 そは、そのかみの  
 戀の姿をそゝる花なり

秋の日だまりに  
 ほのかに  
 山茶花の花咲けり  
 そわそのかみの情熱をそゝる花なり

一冊の代金で  
 御希望通りな  
 五冊の雑誌が  
 自由に讀める  
 川崎 同文庫  
 電話六三〇〇番  
 (中區大塚原町書道屋)

干ヤナギ  
 いか切込  
 賣り始めました  
 鯉節 鯉鹽辛  
 平土橋

丸仙鮮魚店  
 電六六二番

開院  
 五十嵐産科婦人科醫院  
 平町新川町一二  
 醫學博士 五十嵐雄二  
 電話三七〇番  
 (入院應需)  
 外國製品を凌駕する  
 優良純國産品  
 工學博士小林久平先生指導創製  
 左記販賣店よりお求め下さい

ガ金食  
 ス屬器  
 新川町 松崎硝子店  
 二丁目 白土屋陶器店  
 大町 藤倉糸店  
 五丁目 入江陶器店  
 鎌田町 武子商店  
 長橋町 小野作商店  
 土橋町 マルマン商店



忘度有難う存じます  
 レストラン  
 平岡館  
 電話624

高久病院  
 院長 醫學士 高久忠  
 副院長 新潟醫學士 赤羽清  
 藥局長 藥劑師 佐竹菊雄  
 町田 電話五一三番  
 内科小兒科 外科花柳病科  
 耳鼻咽喉科 レントゲン科

耳鼻咽喉科専門  
 平田町(電話六九一番)  
 病室完備  
 自炊便有  
 山内醫院  
 醫學士 山内亨 吉

# 江名町漁港

## 度年明

### 廿七萬圓で擴張

近く監督所で測量開始

江名漁港は近來躍進する同町漁業界の發達に連れて廻船等も漸時繁盛を加へてゐる爲にも二萬五千圓の巨款事業で港内を一米深く浚渫した

が明十一度に於て總工費廿七萬圓で擴張工事を施行することになり之が設計圖作成に備へる爲此處二、三日中に平土木監督所に於て同港測量をなすことになつた

この擴張工事は新規に防波堤造築並に浚渫を爲す

開店十五年の

### 國旗寄贈

菅野屋店主の美譽、平町四丁目菅野屋提灯店主新妻春吉さんは今年で開店以來十五週年を迎へたので記念の爲め本廿六日平第三小學校及び出身地四倉校に長さ二間、巾一間の大國旗を寄附して來た

## 格本禍賀年

僅か五日で

### 廿七萬を突破

平局の取扱数は

昨年より三割激増

轉へ更に拍車を加へた局の賀状整理の宣傳が効を奏したのであらうと

### 山田君司會

文人の慰靈 處あつてか泣かず飛ばさずで暫らく世を静觀の型にあつた評論家山田君雨氏は磐城の物故文人及び記者の慰靈祭を廿日午後から性源寺に執行する由であるが此の費用に當る爲め「磐城の百人物語」を素描す」と題する好著を一月一日付で發行すると

を素描す」と題する好著を一月一日付で發行すると

### 飛躍に準へて

菜種工場休業

製油部一萬五千圓 既報四倉菜種榨油工場は去る九月事業開始以來時價九千餘圓、約千六百俵の菜種を買上げて搾油し一萬五千餘圓の製品を市場に賣出し

## 息づく凶作民

### 政府米無償交附

郡内山間部一人宛八升

郡下本年度凶作地に對して縣は飯米缺乏を憂慮し政府米の拂下を農林省と交渉した結果左記各村に本年中に一人に就き玄米四升及精麥四升合計八升の無償交附を爲すことになつた、但し學齡前の子及七十才以上老若には其の半額給與である

田人組合村一〇〇俵 永戸組合村八四俵 入遠野五一俵 澤渡組合村一〇九俵 上小川組合村五俵 川前五八俵

## 氾濫する爆笑

### 平署明朗色

ボーナスが生む

ユーモラス風景點描

三五年も後五日に迫つた此頃巷は師走狂騒曲に明け暮れてこゝも諸官廳から一齊に交附された年末賞與が狂はしいボーナス景氣を満喫させてゐるが例に洩れず達々日頃見られぬ笑顔が見

## 礦産税解決に

### 縣が乗り出す

試案に依つて妥協

既報問題の平内郷、湯本好間、鹿島、磐崎、飯野の二町五ヶ村に跨る入山、磐城兩炭礦に對する七、八兩年度國稅礦産税附加税分配問題は過般來關係町村間で折衝を續けてゐたが産出の關係で各町村とも自己に有利な決定を見様と焦つてゐるため容易に解決点に到達しなかつた處愈々縣が調定に乗り出すことになり一月七日平町で開く選舉肅正事務打合せ會の際達林地方課長は前記七町村と會見縣稅附加税を基礎に出來上つた縣の試案を提文して妥協させることになつた

上の鶴 菊水 夕顔 都の春 三つの景色 里の四季 酒 松風 須摩の嵐 松竹梅

### 平驛事故防止

平驛は明年一月一、二の兩日午後五時から谷口樓上で十一年度事故防止委員會を開き新事業に就いて協議する

### 郡下町村人口

平 二五、七〇二  
湯本 一七、〇〇三  
小名濱 二、九〇〇  
勿來 二〇、八二一  
四倉 七、六〇一  
江名 六、九三三

## 社告

本日(廿六日)を以つて本年の最終刊號とし直ちに初刷號の準備に移ります、従つて休刊中の重大事件は號外を發行速報致します。

## 常警毎日新聞社

十二月廿六日  
植田 六、五五五  
内郷 二、九七〇  
好間 二、三九九  
上小川 二、三三三  
下小川 一、九八〇  
川前 三、一九一  
計 二、二六二五

られるのも流石歳末風景で委なき魔術師ボーナスの魅力は恐ろしいまでに偉大である

りユーモラスな存在ではあるまいか

渡邊 二、〇三三  
山田 三、二四一  
錦 六、四二一  
上遠野 四、六八一  
入遠野 三、八〇二  
川部 三、七四四  
田人 三、二〇九  
荷路夫 六、五  
貝泊 六、七  
石住 五、六  
飯野 三、七五  
夏井 二、六五五  
高久 二、五〇〇  
豊間 三、八八八  
鹿島 一、八八八  
玉川 二、五〇〇  
磐崎 六、五〇〇  
赤井 七、三三三  
永戸 二、七九一  
箕輪 一、三三三  
澤渡 一、五五五  
三坂 二、九四四  
神谷 三、五五五  
草野 四、六六六  
大浦 四、二二二  
大野 三、八八八  
平窪 三、四四四

# 同志を呼び

## 焼打すると脅迫

### 全勞執行委員平署で檢舉

去る廿五日朝平町搔樋小路色川材木工場事務所には同工場目立職工東京市深川區東陽町三ノ四新沼鐵之助(三)同三吉町三ノ九全國勞働組合同盟支部田中治榮(三)及執行委員中山光一(三)で新沼が去る廿日主人から事業縮少のため一月五日かぎり日給二圓十四錢分の手當を付けて解雇する旨宣告されるや上京して前記二人をつれて來たり解雇手當百五十圓、旅費五十圓を即金で出さなければ電報で同志を呼び寄せ焼打すると脅迫したものであると

### 平町歳末町會

平町歳末町會は本廿六日午後一時から會議室に左の議案に就き開議協議する  
△昭和十年年度臨時特別税戸數割賦課の件△區長及區長代理者推薦の件△寄附採納の件△青年學校職員退職慰勞の件△傳染病院醫師退職慰勞の件

### 坑夫の死

湯本町大字八仙居住入山炭礦坑夫岡澤庄吉(三)は廿四日午後二時五十分頃同坑内で採炭作業中感暈痺を起し死亡した

### 將棋中の男を

## 泥酔漢切る

### カフェー主人の忍傷

平町古鍛冶町生れ當時好間村大字中好間字上川原カフエー業佐藤一男(三)は廿三日午後八時頃飲酒泥酔した結果同村字忽滑六一居住自轉車業推名明(三)方に暴れこみ推名が以前佐藤方カフエー店内で平町芳賀某と喧嘩の際土瓶を破壊した儘辨償せぬは怪しからんと將棋取調べ中

### 暴行犯人の妻

#### 恵まれて歸る

既報郡山市内で十四の少女に暴行して逮捕された内郷村生れ遊藝人大竹徳一郎(三)の内縁の妻相原よしの(三)は猪苗代町に滞在してゐたが夫が大それた罪を犯したのに驚き商賣道具を賣却して旅費を調達し月の身重な體で三才の子を背負ひ夫の實弟實(三)を同伴して廿四日郡山署に出頭囹圄の夫と對面したが悲惨な生活状態に同情した同署では一

### 懷中無一文で

## 豪遊二人男

### 大盡遊びの擧句留置場へ

湯本町大字湯本料理業根本きつ方に廿五日夜二人連つ男が登樓、ドンチャン騒の末廿二餘圓りの代金を請求されるや懷中無一文で平署に突き出された  
この二人の男は山形縣南村山郡柏倉間須村生れ土工飯野友太(三)並に安達郡白石村生渡邊信三郎(三)と判明

### 富塚校長

#### 最輕處分か

既報相馬郡新山小學校の不敬事件に就き富塚小學校長に對する處分問題は注目されてゐるが過般諸橋學務部長が上京文部省に同校長の處分方法を申請中であつたが同省では非常非同校長の立場に同情出來得るかぎり寛大な方針を執る意向であるとのことその處分は最も輕い罰俸處分となる模様である

### 水戸市へ

## 獨立開店

### 佐藤モーター所長

福島モーター商會平出張所長佐藤勝美氏は此程同商會を辭し過般來水戸市柵町に開店し好成績を擧げて同氏經營シボル、フォード自動車部品及各種自動車用品營業の三和商會を專任經營することとなつたが同氏は去る昭和七年赴任以來少壯實業家として業界に君臨したため今回の退社は非常に惜しまれてゐる

### 家出の若妻に

## 賞金二百圓

### 青くなつた亭主殿手配

鳥業松本正一郎(三)は去る八月廿九日住所不詳川越長兵衛なるものより狩獵法違反による捕獲鳥めじろ二羽やまがら二羽を情を知つて譲受け略式罰金二十圓に處された

### 平裁判たより

△石城郡四倉町大字志津字不詳新妻春治氏方漁夫前澤軍次郎(三)は去る九月廿四日午後十時頃同町大字新町三磐井屋事池田ハル方で飲酒中居合せた同町漁船權關手吉田昇に「貴様は元氣でいな」と云はれたのが癪に障り道路上へ引張り出し鐵拳下駄で毆打し頭部に全治三週間の打撲傷を負はせ傷害罪で略式罰金二十圓を言渡された  
△平町田五〇木及炭び小

明日の天気  
西の風晴曇半す

今日晩の部  
後六〇〇 子供の時間  
お話「徳川家康の少年時代」  
後六二五 講演「権利の濫用」  
後七〇〇 講演「和協試案を繞る英佛の政情」  
田〇櫻

明日の部  
後七三〇 朝の修養「大祓の真髓」  
後八〇〇 母の時間「性格異常兒童の話」  
後八二〇 映畫物語「明治一代女」  
後九〇〇 家庭講座「豆腐」  
後九三〇 家庭講座「豆」  
後九四〇 家庭講座「茶」

賞金二百圓  
後六〇〇 子供の時間  
後六二五 講演「粘菌の話」  
後六四〇 講演「凶作を中心とした東北地方の昭和十年度の展望」  
後八〇〇 落語「官景清」  
桂小南  
後八二〇 義太夫「双蝶」  
後八四〇 竹本小仙  
後九〇〇 連続ラヂオ小説「歌行燈」喜多村緑郎

店主が	店員
を	連れて
行	か
れる	正
正	シ
イ	食
堂	正
正	シ
イ	喫
茶	正
シ	イ
酒	場
平・田町	
レストサロン	
電三五二番	



# 瓦解の設

（橋上談上）  
 丸尾 至 陽（書）  
 悟道軒圓玉（作）

一四 赤羽橋の襲撃  
 百延元年十二月の五日、今日は水天宮の祭日、そのころ水天宮は芝赤羽橋の有馬邸の構内にありました。蠣殻町に引けたのは近年のことです、虎の門の金比羅または能勢といふ旗本屋敷にて祭し妙見、それに新大橋の秋元家にてまつりし毘沙門天などは江戸時代大層参詣人が出ました、年の暮のこと、納めの祭日、平素より人が出でゐる、ヒユスは通譯の高木周藏、服部小平、これは幕府より護衛として付け置く町奉行部下の興力、三人馬上にて今赤羽橋を渡つて有馬邸の門前まで来た、時は夕七ツ頃、今で申す四時ごろです、先に立つたは馬丁、淺黄木綿の法被に柿色の三尺をしめ、白足袋を穿き馬柄杓を腰にさし、髪は下馬銀杏、この髪は今劇で致す髪結新三がその下馬銀杏を結つてゐます、明治十四年までの宿車の曳子がかういふ髪を結ひました。鬻か銀杏の葉のやうで刷毛を散らして、その頃粹な髪形、この馬丁が馳けて来て

そこをみてはあぶねえ、今馬が来るんだ、道を開かねえと踏み殺されるぜ、退いた〜〜〜  
 参詣の人を拂ふ、そのあとからとつ〜〜〜と



い、眼玉の青い變な人間だぜ  
 ○「オヤ〜異人の馬を止めて何かいつてゐるせ」  
 △「混雜してゐるからこゝは通れねえとでもいつてゐるんだらう」  
 ○「ウムさうか、馬を引つ返すやうだな、一體こんなところへ馬に乗つて來るのが間違ひだ、お、後へ歸る〜〜」  
 とその頃はヨーロッパ人は珍らしいから参詣人は立ちどまつて見てゐた、ヒユ

スケンはどうと落馬した、してやつたりと三島はをどりか、つて右の肩へさつくり斬りつけた、ヒユースケンはこの痛傷に屈せず、ポケットから取り出したピストル一發はなしたが、三島の右の髪をかすめてそれたこれを見て護衛の服部小平は馬から飛び下りスラリと引き抜いた二刀、三島をのぞんでかゝるを飛び込んだ吉野政助がエイと叫んで横に拂つた、小平はヒラリと身をかはして狼藉者といひながら政助をのぞんで斬り込んだ、其時三島はまたもヒユースケンに斬り付け血の滴る一刀を取り直し服部小平をのぞんで斬り込んだ小平は二人の敵を引き受けて戦つたがかうなると通譯の高木周藏はものゝ役に立たぬ、馬から下りて刀を抜いたが斬り込む勇氣もなくたゞをろ〜〜してゐる、その内に三島三郎に吉野政助は服部小平へさつとをどり込んで人の居ぬ方に逃げ込まうとする、群衆はあとから〜〜とだれを突いて四方から集まる、その内に二人は刀を袖の下に隠し雑踏に紛れて赤羽橋を渡り増上寺の杉林の中に入つてこゝで刀を鞘におさめた。この時に政助は

「三島、二人で引拂ふは危険だぞ、依つてこゝはしばらく別れることにしよう」  
 三「うむ、それがよい、かく本望を達して目出たい、この事を三人織部正殿に申

驛蹄の音高くそこへ來たは先乗の服部小平、そのあとから來たはヒユースケン  
 ○「イヤ〜異人が來た〜公方様のお通ちのやうに俺たちを追ひ拂ふとはふざけた奴だ」  
 △「見ろ〜、髪の中の赤

スケンはどうと落馬した、してやつたりと三島はをどりか、つて右の肩へさつくり斬りつけた、ヒユースケンはこの痛傷に屈せず、ポケットから取り出したピストル一發はなしたが、三島の右の髪をかすめてそれたこれを見て護衛の服部小平は馬から飛び下りスラリと引き抜いた二刀、三島をのぞんでかゝるを飛び込んだ吉野政助がエイと叫んで横に拂つた、小平はヒラリと身をかはして狼藉者といひながら政助をのぞんで斬り込んだ、其時三島はまたもヒユースケンに斬り付け血の滴る一刀を取り直し服部小平をのぞんで斬り込んだ小平は二人の敵を引き受けて戦つたがかうなると通譯の高木周藏はものゝ役に立たぬ、馬から下りて刀を抜いたが斬り込む勇氣もなくたゞをろ〜〜してゐる、その内に三島三郎に吉野政助は服部小平へさつとをどり込んで人の居ぬ方に逃げ込まうとする、群衆はあとから〜〜とだれを突いて四方から集まる、その内に二人は刀を袖の下に隠し雑踏に紛れて赤羽橋を渡り増上寺の杉林の中に入つてこゝで刀を鞘におさめた。この時に政助は

し上げなば定めし御満悦なされるであらう、さらばしばらく別れるぞ」  
 政「貴公も心して行け、大部暗くなつた、通れるには今」  
 といつたが吉野と三島とは別れ去りました。

福島縣平町二丁目  
**西村屋薬舗**  
 薬劑師 鈴木堅助  
 電話 三三番  
 振替 東京六・二九九  
 振替 仙臺一・二〇一

## 冬の通學服賣出し

中學生用 六号 四四〇〇  
 國防色 七号 四四二〇  
 黒小倉服 A六号 三四五〇ヨリ  
 特A六号 三四八〇ヨリ  
 別注文 國防色 五五〇均一  
 特A黒小倉 六四二〇均一

平電 三三〇二  
 店服洋やかふ

## 胃腸性病性

内科 胃腸病科  
 花柳病科  
 性病科  
 皮膚科

門 專  
**松村 胃腸性病性醫院**  
 (番七〇一町南町平)

看護婦急派  
 求めに應じます  
 平町南町  
**平看護婦會**  
 電話三〇七

上田病院  
 平町南町  
 電話二二九番

補装完成！  
 雨除、日除に  
 仲縮自在の敷島のヒヨケを  
 電話二二九番